

マンドリン馬鹿と呼ばれて半世紀

第二部

48 年卒 石田泰和

一部は専門的なマニアックな紹介が続きましたが第二部ではもう少し話題を変えてみます。一部前半でも紹介しましたが作曲家で古賀政男と聞いて知らない人は誰もいないと思います。しかし残念ながらこの作曲者の名前はクラシカルマンドリンの世界ではまず出てくることは皆無です。マンドリンオリジナル曲も何曲かは作曲していると聞いたことがあります。曲名はおろか、楽譜すら入手する方法がわかりません。（歌謡曲の楽譜ではありません）また世界一のマンドリン楽譜コレクションである同志社図書館所蔵の「中野譜庫」にも作曲者名すらありません。

ただウィキペディアなどを読むと古賀政男が学生時代明治大学マンドリンクラブの創成期に貢献したことと、自身も超難曲「幻想的狂想曲」（N. ロマーノ）を独奏するなどの活動記録が見られ、この曲は奏者泣かせのかかなりの難曲ですから、かなりの高度な曲を弾きこなしていたと思われ、それなりの高いレベルの奏者であったことは事実のようです。

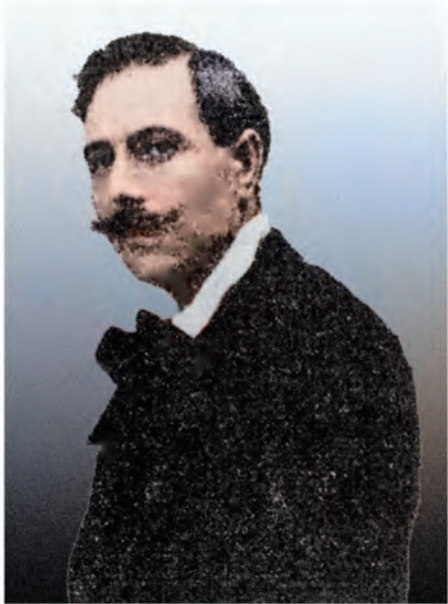
古賀政男の功績により今や歌謡曲の演歌と言え、ばこのマンドリン伴奏がなくてはならない存在になってしまいましたが、ただこのマンドリンを広く国民に知らしめた功績は決して喜ばしいものではなく、かえって一般大衆にマンドリン音楽という誤解を招くことになり、以来今日に至るまで世界の主流であるクラシカルマンドリン音楽が、我が国ではあまり一般に理解されることもなく、マイナーなマニアック的ジャンルの一部として歩み続けることとなってしまいました。



【古賀政男 東京ラブソディの話】

Ricard Casado 作曲「Fleur d' Spana」（スペインの花）という曲が 1922 年 1 月 15 日にフランスのマンドリン専門雑誌 L'Estudiantina 誌から出版されましたが、この曲の主な旋律が古賀政男が 1936 年（昭和 11 年）に発表した「東京ラブソディ」という曲とほとんどの旋律が一緒で、決して偶然や参考したとはいえない、一部の旋律を少し書き直している曲であることがわかります。

当時売れっ子の新進作曲家であった古賀政男があちこちから仕事が舞い込み、新曲に追われて行き詰まって苦し紛れに、フランスの



Ricardo Casado

マンドリンの出版社L' Estudiantina の出版曲から借用したのか、それとも単なるおふぎけのパロディーの果てか、あるいはもっと野心を持ってマンドリンオリジナル曲の可能性を歌謡曲に求めたのか、故人となつては判明しません。

当時はまだ曲に対する著作権という概念が、日本には根付いてない時代でもあって、こういうことが許されたのかもしれない。

このマンドリンオリジナルの「スペインの花」がこんな風に変えられて、しかも古賀政男作曲というレッテルまで貼ってある事実は我々クラシカルマンドリンを愛するものが、どこかの時点で真実を公表し、改めるよう日本の音楽関係に訴えねばならないと思います。

ちなみにこの曲のリズム、テンポは作詞者が名付けるラブソディー（狂詩曲、狂想曲）ではなく、原曲「スペインの花」の楽譜には「パソ・ドブレ」Paso doble（闘牛をイメージしたダンス曲）と記載されており、東京ラブソディーも本来の意味の「ラブソディ狂詩曲、狂想曲」とはほど遠いリズムで歌われています。おそらくラブソディーという名前そのものが当時の日本人の耳に新鮮に入ってきた言葉、斬新な曲名だったのではないかと思います。しかも「東京ラブソディー」で演奏されているリズムテンポもラブソディーではなくパソ・ドブレ（原曲にある指定リズムとテンポ）であることからして、原曲「スペインの花」に対して忠実でオリジナルを損なうことなく、敬意を払うことにより原曲の持ち味の良さをそのまま流用していることがわかります。

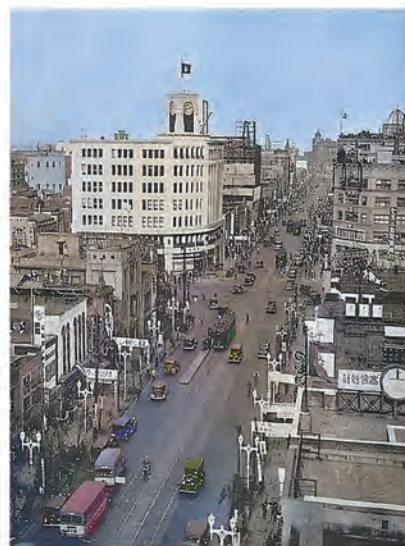
ネットで東京ラブソディーについて調べてみると興味深い掲載内容がヒットします

菊池清麿・著『評伝古賀政男 青春よ永遠に』（2004年アテネ書房刊）参照

という本に書かれている内容は、はっきり「ぱくりである」とは書かなくともそれに近い指摘されてる方もおられるようです。興味のある方は購入してみてください

ネット上本文から引用させていただきました

「《東京ラブソディー》は、マンドリン合奏曲・《スペインの花》（リカルド・カサド作曲）と酷似している箇所がある。というよりは、前奏・歌の導入部分、転調後の八小節旋律までほぼ同じそれなのである。《東京ラブソディー》は古賀政男の楽想によって出来上がったというよりは、《スペインの花》からの抜粋によって創作されたという見方が正しいといえる。業界用語に「パクリ」という言葉がある。そのような行為は許されるべきものではない



古き良き時代1930年頃の銀座

いが、秀逸な作品を創作するためには、他の楽曲のエッセンスを借用することがしばしばある。そのような行為は、ポピュラー音楽の発展を支える基盤となっていた。



ネットの普及やYouTube という便利なサイトができてから、自分の好きな動画や音楽がオンデマンドで自由に取らせる時代がやってきました。いちいち新聞などのTVの番組表によらず、TV 番組を選択する必要もなくなり、簡単に好きな曲などが探し出せます。

この原曲を聴きたい方はネットで「スペインの花 マンドリン」と入力すると YouTube でかなりのマンドリン団体がこの曲と取り上げており原曲演奏を聴くことができます。

「スペインの花」の問題の指摘箇所

楽譜を読める方なら一目瞭然であるが

↓"花咲き花散る宵も 銀座の柳の下で"のこの部分



↓"楽し都恋の都"のこの部分



【 マンドリンオリジナル曲「チャルダス」の話 】

チャルダスあるいはチャルダッシュという曲をご存じでしょうか？名前は聞かなくとも曲を聴かれたら、あーあの曲かといわれるほど有名な曲です。これももしお聞きになりたい場合は you tube など「czardas」「チャルダッシュ」などと打てば、簡単に聞くことが出来おわかりいただけます。

あるいはスケートの浅田真央選手が国際舞台の競技で演出音楽に使った曲、といえおわかりだと思ひます。バイオリニストの葉加瀬太郎（TV 番組情熱大陸などで流れる曲の奏者で有名）が自慢げによく弾いている曲でもあり、バイオリン弾きにはそれなりの超難曲としても知れ渡っています。

このチャルダスというのは「酒場風」という意味のハンガリーのジプシー系音楽ジャンルのひとつで、曲名ではなく音楽の一つのジャンルを指すのですが、イタリアのマンドリン作曲家ヴィットリオ・モンティ（Vittorio Monti 1868. 1. 6 ~ 1923. 2. 2）によって作曲されたチャルダスが最も有名曲とされています。

そして 19 世紀にはウィーンをはじめヨーロッパ中で大流行を極め、ウィーン宮廷は一時チャルダス禁止の法律を公布したといわれます。

曲全体は 2 部から構成され、ゆるやかなラッセン lassu, lassan と急速なフリスカ friss, friška の二つの動きからなります。

多くのジプシー楽団もこのチャルダスをレパートリーにしており、いかにこのラッセンを魅力的に哀愁を帯びて弾きこなし、フリスカを早く弾くかという奏者の技巧の競い合いにもなっています。いろいろな作曲者がこのチャルダッシュを作曲してきましたが、結局はこの V. モンティのチャルダスだけが生き残り、今日ではチャルダス、チャルダッシュと言えばこの曲のことを指すほど有名な曲となりました。

マンドリンのオリジナル曲で最も有名になった曲と言え、真っ先にこのチャルダスの名前があがりますが、一般の方を初めバイオリンを弾く方ですらこの曲が元々マンドリンのために書かれたという起源はほとんどご存じありません。以前、何かの会でこの曲が演奏され、ハンガリアの作曲家とまで紹介したバイオリニストがあつたぐらいです。ついこの前までは作者の経歴や肖像、写真、この作者のマンドリンに関しての他の作品など全く知られていませんでした。

しかも長年にわたり日本のマンドリン界はそのオリジナルマンドリン譜が国内に存在しなく、クラシックすなわちバイオリン譜を元に編曲したチャルダスを今日まで演奏してき



Vittorio Monti

た経緯があります。

しかし近年なって熱心なマンドリン愛好家がイタリアに渡り、このチュルダスのマンドリオンの為に書かれた原曲が発見され、オリジナル曲が2つのマンドリン、ギター、ピアノの編成であることも判明しました。そしてようやくその謎につつまれてきた作曲家の全貌がわかってきた次第です。おまけにネットの普及やマンドリン関係のホームページ上の掲載努力により、ようやくクラシック界にも情報が広まったというわけで現在は Vittorio Monti czardas という項目でかなりの情報がヒットし、写真もたくさん出てきます。



これによるとこれまでチャルダス以外の曲はほとんど不明とされてきたものが、現在判明しているだけでもマンドリン関係で400曲近くもあり、またそのチャルダスも第1、第2が存在すること、(有名なのは第1の方です) 死亡年月日も誤りだったことまで判明しました。

さて、この古くからマンドリン界で言われてきた、チャルダスがマンドリンのために作

曲された曲という根拠となった原本は、1914年にフィリップ、ボーン著 (Philip J. Bone) の「The GUITAR AND MANDOLIN」という本が出版され(現在は1954年に修正加筆された第2版が主流になっています) この本の2版の中にこのことが記載されています。

マンドリンに携わるものなら必ず目にするいわばマンドリン作曲家の辞書的存在、バイブルともいえる出版物にこのように載っております。

ただ、当時のヨーロッパの状況を考察しますとマンドリンの祖国イタリアでマンドリンが百花繚乱(りょうらん)と咲き誇ったのは19世紀後半から20世紀初期にかけての約50年間で最も盛んであったとされております。エマヌエル二世によって統一復興されたイタリアは、この楽器をこよなく

愛したマルゲリータ妃の擁護の元で、貴賤を問わず上下を挙げてイタリア中マンドリン音楽に酔った時代があったとされております。

このマンドリンブームによりヴァイオリン教師は職を失い、急遽マンドリン教師に鞍替えしマンドリン教室まで開いたとも記録にあります。



V. Monti
Vittorio Monti

我々の年代なら一時期エレキブームというのをご存じだと思いますが、あのときは下駄屋が職を変えてギターを作って売っても売れたという、有名な話があるほど日本中がエレキギターに酔いしれた時期がありました。ただそれもきわめて短命に終わったことは記憶に新しいかと思います。あのようなブームがおよそ50年以上に渉（わた）って、マンドリンブームとイタリア全土、やがてヨーロッパ全域で起こったとお考えいただければいいのではないのでしょうか。

Monti, Vittorio, an eminent composer, mandolinist and conductor, was born at Naples, January 6, 1868, and died in Paris about 1925. He obtained fame in the musical world by his composition entitled Czardas, composed for the mandolin and exceedingly popular with violinists and other instrumentalists. He was an educated musician who migrated to Paris at the commencement of the twentieth century where he was a highly esteemed teacher of the mandolin and composer. He was subsequently conducting and teaching during the

そもそもマンドリンそのものがバイオリンと同じ調律、音域の楽器であることと、19世紀後半～20世紀前半の古い楽譜を調べてみると結構、Mandolin (Violin) と併記してある楽譜に出くわすことが多くあります。当時はマンドリン曲ヴァイオリン曲の境界線が結構曖昧でどちらにも売れるように書いていたことは事実です。

最も権威ある文献が上・右記のように書いているわけですが、V. モンティについては元々ヴァイオリン畑の作曲者であることから、この曲がマンドリンのために書かれたというのはにわかに信じがたい点もあります。

当時の流れとしてマンドリン楽隆盛の波にのって、マンドリン独奏者によって好んで弾かれていたものがバイオリニストも取り上げるようになっていったのではないかと推測されますが、今となってはやはり ” マンドリンのために書かれた有名曲チャルダス ” としておくのがなんとなく夢やロマンがあり賢明かと思います。

Monti, Vittorio, an eminent composer, mandolinist and conductor, was born at Naples, January 6, 1868, and died in Paris about 1925. He obtained fame in the musical world by his composition entitled *Czardas*, composed for the mandolin and exceedingly popular with violinists and other instrumentalists. He was an educated musician who migrated to Paris at the commencement of the twentieth century where he was a highly esteemed teacher of the mandolin and composer. He was subsequently conducting and teaching during the fashionable season at the Riviera resorts, returning to Paris at the conclusion. In 1910 he founded, in Paris, a society of professional, or semi-professional mandolinists, guitarists, etc.—an *estudiantina* or mandolin band—which he directed under the title of “The Monti Group.” Among the members of this *estudiantina* were well-known mandolinists, guitarists and composers—Goldberg, Chas. Feret, his brother, and the poet-guitarist Gelas. The public performances of this *estudiantina*, at which world renowned mandolinists and guitarists appeared as soloists revealed the tonal beauty of these instruments and established new standards and ideals. It is not generally known that Monti was a mandolinist; his *Czardas* was composed expressly for this instrument also many other of his mandolin compositions were subsequently transcribed and published for violin, piano, and also set for songs. He was a versatile composer, employs the mandolin in the score of his opera, *Noel de Pierrot*, is the author of a *Method for the Mandolin*, with French and Italian text, published by Monzino, Milan, and a *Petite Mandolin Method*, Op. 245, English text, issued by Ricordi, Milan. Nearly one hundred of his compositions, salon music, with albums and collections were issued in Paris by French publishers, principally Pisa, Rowies, Beuscher, Besnard, Gregh, etc. Ricordi, Milan, and Breitkopf & Härtel, published numerous compositions for two mandolins and guitar or piano. Monti's compositions for *estudiantina* were orchestrated for two mandolins, mandola, lute, guitar, harp and flute. Some of his most popular mandolin compositions were set to Italian, French and English words as songs, the favourites were: *Cherubin*, *Ciao* and *Priere des Anges*. He provided guitar accompaniments to Tosti's songs and wrote French songs with guitar which were issued by Ricordi, Milan.

Philip Bone 著「The Guitar and Mandolin」
1954年 第2版に掲載された Vittorio Monti の *czardas*



長々とクラシカルマンドリンの話になりまして最後まで読んでいただけたかどうか分かりませんが、まだまだ書きたいことは山ほどあり、筆者が約30年以上探し続けてきた世界三大マンドリン名器の最高グレードのオールド楽器（100年ぐらい前に作られた名器を差します、中古楽器とは違います）が最近やっと揃った話しなど、掲載したいことはまだまだ色々たくさんありますがこの辺で閉幕させて、あとは筆者のホームページなどご覧ください。

<http://vinaccia.jp/nj-collect/> 「フィオレンティーノのホームページ」

こんな狭い音楽ジャンルの世界に半世紀も取り組んできたマンドリン馬鹿と呼ばれてもめげない筆者の顛末記のほんのごく一部でした。

2022年11月記